

東南アジア、オセアニア安定の鍵を握る東ティモールの今後 「経済建設や制度づくりなど日本に貢献できることは多い」

2002年に独立を達成してからも、内紛が絶えない東ティモール情勢。

6月末にもアルカティリ首相が辞任するなど、依然混迷する東ティモールだが、果たして日本はどのような形で付き合っていけばいいのか？

拓殖大学学長でグスマン大統領とも親交のある渡辺利夫氏に聞いた。

**拓殖大学学長
渡辺 利夫**

Watanabe Toshio

国家統治機構が 破綻した最貧国

紛争が再燃し、アルカティリ首相が辞任するなど情勢が緊迫する東ティモールですが、現状を渡辺さんはどのように見ておられますか。

渡辺 東ティモールは、アジアの中でもっとも貧しい国です。とくに衛生状態が悪く、マラリア、黄熱病などの熱帯病が依然として、撲滅されていません。深刻なのは、司法、行政、立法、教育、医療などの全ての分野で機能麻痺が生じており、国家統治機構が破綻状態にあることです。

一九九九年にピークに達した紛争の傷跡が、至るところに無残な姿を晒していました。九年という年は、東ティモールの住民がインドネシアに併合を希望するか、あるいは独立を志向するかの住民投票を国連監視下で行つた年です。結果は独立派が八割で圧勝し、これでスムーズに独立に移行するかと思われ

たのですが、二割の併合派の民兵が独立派の人々に襲いかかりました。殺戮、略奪、放火、レイブ、ありとあらゆる狼藉の限りを尽くしたのです。この独立派と併合派の対立は、隣人同士の殺し合いという「骨肉相食む」、実に凄惨な闘争でした。

まだ、そのときの闘争の名残があるわけですね。

渡辺 はい。熱帯の国ですから、緑したたる、遠目には実に平和なたたずまいに見えますが、一歩、村の中に入つていくと、ありとあらゆる家に放火の焼け跡が残っています。そこに人々が無氣力にたたずんでいる姿が哀れでした。肉親や同僚を殺されたという怨念が、両派の人々の胸底に、くすぶっています。

ちょっと何かした小さな諍いが起これば、それが大きな紛争へと発展する、そういう悲劇があり得るのではないか、という不吉な思いを抱きながら帰つてきましたのですが、この予感は不幸にも的中してしまいました。

アルカティリ首相 辞任の背景にあるもの



わたなべ・としお 1939年山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。85年筑波大学教授、87年東京工業大学教授、2000年拓殖大学国際開発学部学部長を経て、05年4月拓殖大学学長に就任。

—— 紛争が現実に起つた
しまつたわけですね。

渡辺 今回の紛争発生の直接の原因是、そんなに大きなことではなかつたと思われます。財政資金が足りないために、兵士に給料が払えない、そのためにほんの一部の兵士を解雇したことが発端でした。

東ティモールには東部と西部という地域的対立がありますが、解雇された兵士の中に西部の兵士が比較的多かつたようですが。その不満が燃え上がり、東部兵士との紛争に発展していくわけです。原因は小さなことなのですが、ちょっととした火種がワツと燃え上がるような欲求不満が、この社会には充満しているということなのだと思います。

—— 不満がく
すぶり続いている
と。

渡辺 無理もあ
りません。労働人口の八割が失業しているようです。仕事にありつけている人は二割しかいないというわけですからね。

現地で聞いた話ですが、一日0・5ドル以下の生活を強いられている住民が、約四〇%い

るというのです。日本円でいうと50円か60円です。そんなことが、「こんな感じや、とても生きていけない」という気持ちがありますから、何かのきっかけがあるとその不満に火がつくんですね。

—— でも、怒りの矛先は政府に向かわなかつたのですか。
渡辺 要するに、統治力を備えた政府が存在していないのです。西部対東部の住民対立とか、グスマン派とアルカティリ派との権力闘争といったことだけが政治の関心事であつて、まともな政治が行われていないといつてもいい。

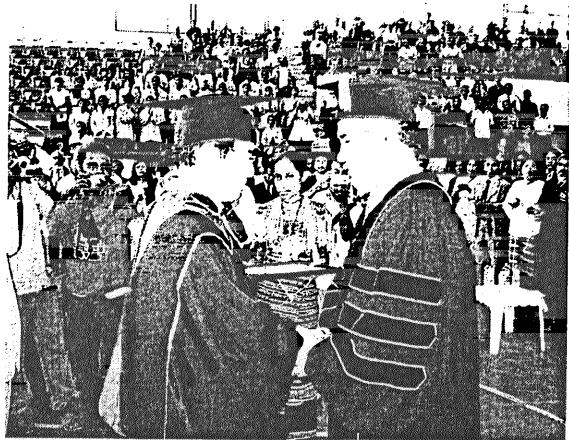
事態の深刻化を非常に危惧したグスマン大統領が、アルカティリ氏に辞任を要求して、ことを収めようとしました。しかし、アルカティリ氏も一時その方向に傾きかけたのですが、同氏は与党 FRETILIN (フレテリン) の党首でもあって、辞めれば与党が瓦解してしまう。また、アルカティリ氏配下の勢力が氏の辞任を容易に認めようと

るというのです。日本円でいうと50円か60円です。そんなことで、「こんな感じや、とても生きていけない」という気持ちがありますから、何かのきっかけがあるとその不満に火がつくんですね。

しかし、もし大統領が辞任しそのものが瓦解することは目に見えています。そこで苦惱の果てにアルカティリ氏が辞任を決意した、というのが、直近の情報です。

—— ところで、今年の二月に拓殖大学はグスマン大統領に名誉博士号を授与されています。これはどういった理由からなんですか。

渡辺 東ティモールはインドネシアから、悲劇的な形ではありますましたが、独立を達成し、二十一世紀最初の国連加盟国になりました。この苦難に満ちた独立のプロセスを貫して指導してきた人物が、グスマン氏です。その彼が初代大統領になりました。東南アジアの忘れられない、そんな次第で、拓殖大学が名譽博士号を差し上げようとな



東ティモール民主共和国グスマン大統領(右)に名誉博士号を授与する渡辺利夫・拓殖大学学長

招きして、この機会に拓殖大学で「紛争後の平和構築」に関するシンポジウムを開きました。東ティモールの平和構築のために働いた百人ほどの日本人が集まってくれて盛況でした。

アルカティリ首相のスピーチの後、質疑応答があつたのですが、これに対するアルカティリ氏の対応はまことに鮮やかなかつたわけです。

本当は日本に来て、学生にメッセージをいただきたかったのですが、現職の大統領ですから、そうは参りません。結局、私と四名のデレゲーションが東ティモールへ行つて、名誉博士号を差し上げてきました。

——二月末ですね。

渡辺　　はい。それから、一ヶ月後、アルカティリ首相と外務大臣兼国防相のラムス・ホルタ氏が来日することになりました。東ティモールのナンバー2とナンバー3ですね。二人をお

もので、大変に優秀なテクノクラートの姿に感銘を受けました。アルカティリ氏があまりに見事に答えるので、隣に座つていたノーベル平和賞受賞者のホルタ氏に発言の機会を与えることができなかつたほどです。

いまだに東ティモールのような過去の傷の痛みにふるえる国が存在します。

目配りをしているという姿勢が不可欠です。

訪問できたのだな、と感じ入った次第です。まさに、嵐の前の静けさだったのでしょうか。

——渡辺先生の予感どおり、紛争が発生してしまつたわけですが、内紛の歴史が根強い国ですね。

——渡辺先生の予感どおり、紛争が発生してしまつたわ

た次第です。まさに、嵐の前の静けさだつたのでしょうか。

——当然、独立勢力は、それに我慢できないから紛争が起きたわけですね。

——渡辺　ええ。やつと独立できただと思つたら、インドネシアと戦わなきやならない。グスマン氏をトップとするフレテリン

トガルに長期にわたり支配されてきた国です。ところが、一九七四年にポルトガル本国で無血革命が起こります。そして、新しくできた政権は、海外植民地の放棄宣言を出しました。これをきっかけとして、東ティモールの中で独立機運が高まりました。

この間、スハルト政権は東ティモールの「インドネシア化」を懸命に進めました。司法、行政、立法、教育、保健、医療等々の国家統治機構の中核に印度ネシア人を送り込んで印度ネシア化を図つたわけです。言つことを聞かない人間は、殺されていきました。六十万人の人口のうち、二十万人が犠牲になつたといわれます。いかに手荒い支配であつたか想像できますね。

さつそく、その翌年にフレテリンという独立派が結成され、そこで彼らが東ティモール民主共和国の独立を宣言しました。しかし、隣のインドネシアのスルカルモールで紛争と権力闘争が再燃してしまいました。考えて見る

いだに東ティモールの要人とのコネクションができてよかつたなあと思つていた矢先、東ティモールで紛争と権力闘争が再燃してしまいました。考えて見る

いだに東ティモールを侵攻させて独立派を排除し、インドネシア二十七番目の州として、東ティモールを組み込んでしまつたんで

すね。

——渡辺　このようない状況を見る

に見かねた国際連合が、多国籍軍を派遣し、国連暫定行政機構を設立しました。このPKOと暫定政府機構が東ティモールを統治下におき、その間に建国を進めるというシナリオです。大統領を選出し、憲法を制定し、総選挙をやって議会をつくる。司法、行政、立法も整えて、國家としての体裁をつくってきたわけです。

日本のODAが有効性を發揮する

— 東ティモールの今後ですが、教育の整備など日本にも協力できることは何かあるのでしょうか。

渡辺 教育はもとより、日本に支援できることは沢山あります。治安面での貢献などは、早くに考えねばならないでしょう。何より、日本はインフラ建設と制度づくりに應分の力を出すことができないだろうか、と思ひますね。

そもそも、この国がなぜ破綻国家になってしまったか、といふと、國家統治機構のありとあらゆる細胞の中に入り込んだインドネシア人が、独立後にその全員が帰つてしまつたことに発します。この「空洞」をいかに埋めるか、という問題意識が不可欠です。

正確な数はよくわからないの

に見かねた国際連合が、多国籍軍を派遣し、国連暫定行政機構を設立しました。このPKOと暫定政府機構が東ティモールを統治下におき、その間に建国を進めるというシナリオです。大統領を選出し、憲法を制定し、総選挙をやって議会をつくる。司法、行政、立法も整えて、國家としての体裁をつくってきたわけです。

渡辺 教育はもとより、日本に支援できることは沢山あります。治安面での貢献などは、早くに考えねばならないでしょう。何より、日本はインフラ建設と制度づくりに應分の力を出すことができないだろうか、と思ひますね。

そもそも、この国がなぜ破綻国家になってしまったか、といふと、國家統治機構のありとあらゆる細胞の中に入り込んだインドネシア人が、独立後にその全員が帰つてしまつたことに発します。この「空洞」をいかに埋めるか、という問題意識が不可欠です。

正確な数はよくわからないの

ですが、全教員の九〇%、行政機関の四〇%の人がインドネシアに帰つてしまつたそうです。その結果、司法も行政も立法も教育も医療も、完全な機能不全に陥り、まさに國家が破綻してしまつたのです。我々が見てきたのはまさにそういう「破綻国家」状態でした。

— われわれ日本人は、どのように接していくべきかと考へますか。

渡辺 東ティモールは人口九十二万人、国土面積は岩手県とほぼ同じ大きさですから、小さな国です。日本が制度づくりから始め、インフラはもちろん、経済建設の全般にそんなにお金

をかけずに、東ティモールをまともな開発途上国に戻すことが可能です。そうなれば、東ティモールを日本型の開発モデルに仕立てることができるかもしれません

私は、東ティモールは、日本のODAが有効性を發揮し得る国の一つかと思います。いまは暴動の最中で動けませんが、私は、落ち着いたらまた行ってこようと思っています。

東ティモール大学の学長とも今回親しくなりました。将来的には、拓殖大学との学術交流協定や学生の交換プログラムも実現したいと考えています。

(聞き手 本誌・松村聰一郎)